

自律的なキャリア形成を支えるビジネス日本語教育の試み
An Approach to Business Japanese Education That
Supports Autonomous Career Development

山本晋也, 周南公立大学
Shinya YAMAMOTO, Shunan University

1. 本研究の背景と課題

近年、日本社会全体の少子高齢化と深刻な労働力不足を背景として、外国人留学生（以下、留学生）の日本国内就職をめぐる社会環境が大きく変化している。特に、受け入れ先となる企業の規模や所在地・業界等の選択肢が多様化する中で、留学生にとっては自ら必要な情報を収集し、複数の選択肢を比較しながら意思決定を行うことが求められるようになった。このような状況においては、留学生のキャリア形成支援を考えるうえで、日本語能力を高めることだけでなく、将来を見通して自身のキャリアを主体的に構築していく力、すなわち「キャリア自律」（花田・宮地，2003）の促進がこれまで以上に重要となる。

留学生のキャリア形成支援に関しては、日本語教育分野において「ビジネス日本語」の研究／実践がその中心的役割を担ってきた。一般社団法人留学生支援ネットワーク（2021）は、ビジネス日本語教育を「就職活動から就職後までを視野に入れ、高度な日本語能力だけでなく、ビジネスの背景にある文化や考え方を理解し、社会人として生活していくための包括的な能力を育成するもの」（p.17）と定義する。そして、そのような包括的な能力の育成に向けては、ビジネス場面で求められる日本語能力の育成のみならず、社会に出て仕事をするための基礎的な態度や能力を育成する「キャリア教育」の視点に加え、言語使用の背景にある企業文化や商習慣、企業活動の理解に向けた「ビジネス教育」の視点が必要であると述べる（p.17）。

一方、日本語教育分野のキャリアに関する研究／実践の動向は、前述のような就職活動や就労場面の課題解決につながるワークキャリアの形成から、長期的な人生設計を支えるライフキャリア形成へと移りつつある。日本語教育学会の発行する学会誌『日本語教育』の特集テーマを見ると、2020年4月発行の175号において「日本語が拓く多様なキャリア形成」が掲げられたのを皮切りに、3年後の2023年4月発行の184号では「ともに学び未来を描くキャリア形成」、さらに3年後の2026年4月発行の193号では「ライフキャリアと日本語教育」と、キャリア形成を扱う特集が継続して組まれている。193号の巻頭で述べられている通り「キャリアを職業選択という狭い意味のみで捉えるのではなく、生涯にわたる個人の成長・発達として捉える動き」（p.1）が、日本語教育でも広がりつつあるといえよう。

松尾・山本・高井（2026）は、2004年4月から2025年6月までに発表された「キャリア」「日本語教育」をキーワードとする計144本の文献調査の結果から日本語教育分野のキャリアに関わる研究／実践の動向を示している。松尾らによれば、調査対象となった144本の文献中、キャリアに関する日本語教育実践およびそのあり方を扱ったものが35本あり、さらに、そのうち約7割にあたる26本

の文献が、大学・大学院に在籍する留学生を対象とした教育実践であったという。また、前述した 35 本の文献の主な研究内容とその目的を見ると、キャリア意識の涵養をめざすものが約 9 本と最も多く、次いで、就職活動／キャリアへの理解促進が 7 本、自己理解の促進とキャリア展望をめざすものが 6 本と続いている。

以上の先行研究から、留学生のキャリア形成支援としてのビジネス日本語教育の役割は、就職・就労の土台となる日本語能力の育成や文化習慣の理解促進にとどまらず、学習者自身の内的キャリア形成までを視野に入れる必要があるといえる。では、具体的にどのような授業／授業デザインを行うことで、留学生のキャリア自律をいかに促すことができるのだろうか。

そこで本研究では、筆者が 2024 年度および 2025 年度に実施した「ビジネス日本語Ⅰ」「ビジネス日本語Ⅱ」の授業実践を対象に、実践研究としての振り返りを行った。ここでいう実践研究とは、「教師が自らのめざすものに向けて、その時点で最良と考えられる学習環境をデザインし、よりよいと思われる実践を行い、それを実践場面のデータにもとづいて振り返ることによって、次の実践をさらによくしようとする一連のプロセス」（舘岡，2008，p. 45）を意味する。授業に参加した留学生の学びの実感と、授業デザインの関わりについて検討する中で、日本語教育を通じて留学生の自律的なキャリア形成をいかに支えることができるのか、その示唆を得ることが本研究の目的である。

2. 実践概要

2.1 授業構成と参加者

本研究の対象は、2024 年度および 2025 年度に筆者が所属する大学で実施した「ビジネス日本語Ⅰ」「ビジネス日本語Ⅱ」の 2 科目である。以下の表 1 に示すのは、2024 年度～2025 年度に実施したビジネス日本語Ⅰ・Ⅱそれぞれの主な授業内容の一覧である。

表 1 全 15 週の授業概要

ビジネス日本語Ⅰ	ビジネス日本語Ⅱ
1. 依頼	1. エントリーシート作成
2. アポイントメント	2. 「自己 PR」の発表と修正
3. 謝罪	3. 「学生時代に力を入れたこと」の作成
4. 感謝	4. 「〇年後のキャリアプラン」の作成
5. 自己紹介・他者紹介	5. 面接対策①
6. 名刺交換・ビジネスマナー	6. 面接対策②
7. 挨拶・お辞儀	7. 業界研究・企業研究①
8. 誘い・断り	8. 業界研究・企業研究②
9. 指示	9. 就活スケジュールと就活サイト
10. 電話対応・メモ	10. ゲストスピーカー①（先輩留学生）
11. 報告（報連相）	11. ゲストスピーカー②（県の就職支援）
12. 申し出	12. ゲストスピーカー③（NPO 法人）
13. 許可	13. BJT（ビジネス日本語能力テスト）
14. ウチ・ソト	14. SPI（総合適性検査）
15. 期末試験	15. 授業の振り返りとキャリアプラン作成

「ビジネス日本語I」「ビジネス日本語II」のいずれも学部留学生を対象とする日本語選択科目であり、授業時間は1回90分（全15週）であった。各授業の履修者はアジア圏出身の留学生5～8名であり、ほぼ全員が大学卒業後に日本国内での就職を希望していた。

「ビジネス日本語I」は、教科書としてスリーエーネットワーク社の発行した「外国人のためのケーススタディで学ぶビジネス日本語 中級」を使用し、テキストの読解を軸として進化した（表1・左側）。全15週を通じての目標は、ビジネス場面で用いられる日本語表現や語彙、関連する文化・習慣の理解と同時に、それらを学ぶ自己／他者への理解を深めることにある。1コマ90分で教科書の1課を扱い、本文の内容理解を土台として、各課のテーマに関連する日本語表現や語彙、文化・習慣をめぐるディスカッションやプレゼンテーションを教室活動の中心に据えた。

また、「ビジネス日本語II」では、日本での就職活動に対する理解の促進と、それを契機とする長期的なキャリア形成について考えることを目指し、エントリーシートの作成や、面接対策、業界研究・企業研究といった実際の就職活動を想定した諸活動を行った（表1・右側）。10週目以降は先輩留学生や県の就職支援担当者等をゲストスピーカーとしてお招きし、教室内だけでは得られない情報や経験に触れる機会を設けた。

2.2 授業デザインとその理念

「ビジネス日本語」を主題としつつ、教室活動の内容が大きく異なる両科目であったが、共通する授業デザインとして「理解・表現→対話→振り返り→次の活動」というサイクルを意識していた。その一例として、教室活動の具体的な流れを示したのが、以下の表2である。

表2 教室活動の流れ

ビジネス日本語 I 【謝罪】 (第3週目)	ビジネス日本語 II 【業界研究・企業研究】 (第7週目～第9週目)
1. テキスト本文の読解・内容理解 2. 表現や語彙の確認 3. テーマ事例について検討 (なぜ「謝罪」が必要か、どうすべきか) 4. 小グループで共有→発表 5. 授業振り返り (リアクションペーパー作成) 6. メール課題 (「謝罪」メール文を作成→送付)	1. 「業界」「業種」について講義 2. ワークシートに希望する業界・業種を記入 3. なぜその「業界」「業種」を希望するのか、理由を考える 4. 上記2・3について、小グループで共有→発表 5. 就活サイト等から希望する企業3社を選び、企業研究を実施

例えば、「謝罪」をテーマとするビジネス日本語Iの授業では、テキストの内容理解を出発点として、テキストで取り上げた事例においてなぜ謝罪が必要なのか、実際の場面ではどのように対応すべきなのかを小グループで検討し、その後、全体で共有・発表するという一連の流れを中心に据えた。そして、授業の最後に

リアクションペーパーによる振り返りを行った。また、次週までの課題として、具体的なビジネス場面を設定したうえで、謝罪のためのメール文作成の課題へとつなげた（表 2・左側）。

ビジネス日本語Ⅱで 7 週目～9 週目にかけて実施した「業界研究・企業研究」では、「業界」「業種」について筆者が簡単な説明を行った後、学生それぞれが希望する業界・業種をワークシートに記入し、なぜその業界や業種を志望するのかという理由を考えた。さらに、小グループで自身の考えを共有・発表したうえで、就職情報サイト等を利用して希望する企業を 3 社選び、企業研究を行った（表 2・右側）。

このように、いずれの科目においてもビジネス日本語に関する知識や日本語表現を学ぶだけでなく、それを他者との対話や自己の振り返りを通じて、次の具体的な活動へとつなげることを意識し、授業設計およびその運営を行った。

3. 分析・考察

3.1 分析データと観点

本研究において分析対象としたデータは、2.1 で述べた 2024 年度～2025 年度の「ビジネス日本語Ⅰ」「ビジネス日本語Ⅱ」における、1) 発表者が作成した授業記録、2) 授業アンケート、3) 授業課題として提出された小レポート、4) 最終レポート、5) 留学生および日本人職員へのインタビュー記録の計 5 点である。これらのデータについて、学生が何を自身の学びとして捉えていたのか、また、その学びの実感と授業デザインがどのように結びついているのかという二つの観点から、該当する記述を抜粋し、分類・検討した。なお、上記の調査はすべて筆者の所属先への申請および協力者の許可を得て実施した。

3.2 分析結果

3.2.1 ビジネス日本語Ⅰにおける学び

以下に示すのは、分析データから抜粋した記述の一部である。（下線は筆者）

【場面に応じた表現の学習】 【敬語の再確認】

1 年生のときにも敬語を勉強しましたが、やっぱり覚えてないこともあるし（中略）それで、実際に就活とか働いたときにどう使ったらいいかというのをまた勉強できたので、よかったです。（中略）それであの、敬語とかその電話対応とかもそうなんですけど、そんなときにどう話したらいいですかというのは、すごく勉強になりました、これはもっとやったほうがいいと思います

（学生 A：インタビュー：2024）

【ビジネスマナーの理解】

様々なビジネス日本語を学びました。日本語だけではなく、一番はメールでお願いをするときにこれはだめですとか、アポを取るときとかことが一番いいと思いました

（学生 B：授業アンケート：2024）

テキスト読解を軸とする「ビジネス日本語Ⅰ」に参加した留学生の学びの実感
は、「場面に応じた表現の学習」「ビジネスマナーの理解」「文化的慣習の理
解」「敬語の再確認」など、ビジネス場面に関する言語文化的知識の習得と、そ
の応用に関するものに集中していた。同科目を受講した留学生の多くが既に3年
～4年以上の日本語学習および日本での留学生活を経験しており、敬語やビジネ
ス場面における文化的慣習についても、既に一定の理解があるとみられる。一方
で、知識としてそれらの理解がありつつも、例えば、電話対応などの具体的な場
面で「どのように話したらいいか」については、あまり自信がないという声が多
くみられた。ゆえに、以前に学習した内容を再確認するとともに、就職活動や実
際のビジネス場面でのどのようにそれらの知識を応用するのかを、改めて学べたこ
とが評価されたと考えられる。

3.2.2 ビジネス日本語Ⅱにおける学び：ゲストスピーカー

一方、「ビジネス日本語Ⅱ」では、就職活動そのものに対する理解に加え、
「業界・企業理解」「就職活動のイメージ形成」「自信の獲得」「漠然とした
不安の軽減」「自己分析への気づき」「キャリアへの意識」「自己理解の深化」
「予備体験的な学び」「現在の自分の状況への気づき」など、個人の内面にある
キャリア形成に直接関わる学びが確認された。中でも、特に多くの学びにつなが
ったのが、学外のゲストスピーカーによる講演と交流の機会であった。

【自己分析への気づき】 【就職活動への自信】

ゲストスピーカーのお話を聞いて、自己分析についてもう一度考えてみるき
っかけになった。自分をアピールすることを難しく考えずに簡単にしても
いいと同時に、こんなに簡単でもいいのかとも思った（中略）これからの就
職活動について途方に暮れていると思いましたが、ゲストスピーカーの説明
のおかげで、少しずつやり遂げられると思うようになった。

（学生 A：小レポート：2025）

【漠然とした不安の解消】 【就職活動への自信】

就活について自信や勇気がなく、あまり始めたいという気持ちがなかったで
すが、先輩の話聞いて勇気ができました。これからの就活のため、一応な
んとか始めようと頑張れる契機になりました！

（学生 H：小レポート：2024）

分析を通じて明らかになったのは、同科目に参加した留学生の多くが、就職活
動に対する不安を抱え、また、就職活動を含む進路選択や将来への葛藤に直面し
ていたという点である。2.1 で述べた通り、同科目に参加した留学生の多くが卒
業後に日本国内での就職を希望していた。しかし、実際に授業内で確認した際
には、具体的なキャリアプランを持っている留学生はおらず、大半が何となく「日
本国内での就職」を希望している状態であった。ゆえに、日本国内での就職を経
験した先輩留学生や、県の就職支援担当者といったゲストスピーカーによる講演
が、【就職活動のイメージ形成】につながり、また、就職活動や自身の将来に対

する【漠然とした不安の軽減】と【就職活動への自信】につながったと考えられる。特に、先輩留学生については、同じ立場を経験した留学生であることからその語りに対する共感が生まれ、実際に就職活動に取り組む契機となったことが示された。また、自己分析をはじめとする諸々の活動についても改めて考えるきっかけになったという学生もあり、モデルケースとして他者の経験に触れることが自己理解を促す契機となっていることが示唆された。

3.2.3 ビジネス日本語Ⅱにおける学び：業界研究・企業研究

【現状に対する気づき】

もっと自分を知る必要があると感じました。行きたい職種を決めることもできました。でも会社には色んな会社があって、そこから行きたいと思うところを決めるのは難しいし、もっと情報が必要だと思いました。

(学生 D：最終レポート：2025)

【業界や企業への理解】

会社を探すたびに自分が思っていたよりも様々な会社があることに気づいた。(中略)そして、これからの就職活動のための計画も立てることができた。大まかなことでまだ不明確な未来だが、立てた流れでエントリしてみたいと思う。

(学生 E：小レポート：2025)

2.2 でその詳細を述べた業界研究・企業研究もまた、ビジネス日本語Ⅱに参加した留学生にとって様々な学びにつながっていることが明らかになった。就職を希望する留学生の多くが、実際にどのような業界・企業があるのか、また、自身の希望する業種や職種が、どのような業界に位置づけられるのかを理解していなかった。そのため、留学生はまず自分が想像していた以上に多様な企業が存在することを知り、希望する業種や職種を具体的に考える一方で、企業を選択するためにはさらに情報が必要であるという【現状に対する気づき】を得ていることが明らかになった。また、企業規模や経営理念のほか、実際の働き方や福利厚生などを調査することで【業界や企業への理解】が深まった結果、インターンシップや就職フェスへの参加や、企業へのエントリーなど、具体的な進路選択の動きへとつながっていることが示された。

3.3 考察

以上の分析から、本研究の対象である「ビジネス日本語Ⅰ」「ビジネス日本語Ⅱ」の実践は、就職・就労の土台となる日本語能力の育成や文化習慣の理解促進にとどまらず、留学生が自身のキャリアについて改めて考え、自ら具体的なキャリア形成を進めていく契機として機能していたと考えられる。そのような学びの実感を支えたのは、「ビジネス日本語Ⅰ」におけるテキストの内容理解に基づくディスカッションやプレゼンテーション、「ビジネス日本語Ⅱ」における先輩留学生や専門家との交流、そして、就職活動に関する各種の予備体験的な学習経験

であった。また、テーマの内容理解を出発点とする対話型の授業デザインが、学生のキャリア意識の形成にも寄与していたと考えられる。特に、多様な他者の経験や情報に触れることで、学生は自分自身の現在の状況を捉え直し、将来に向けて必要な行動について考えることができていたのではないだろうか。

ただし、今回の実践においてはいくつかの課題も残された。最も大きなものが、授業内容が「就職活動のための準備」に偏ってしまったという点である。なかの(2013)が指摘した通り、「ビジネス日本語」を標榜する授業は、ややもすると日本企業や社会に流通する言語や文化習慣を学習項目として規範化し、留学生にとって同化的な圧力として作用しかねない。今回の分析では、多くの留学生がそうした学習内容を「学び」として肯定的に捉えている一方で、ビジネス場面における言語使用や文化習慣への理解に固定的な見方を提供し、また、就職活動や将来への不安を過度に煽る内容になっていた可能性も否定できない。留学生が進路選択を含むキャリア形成を自分自身の課題として捉え、主体的に考える契機となることを目指すのであれば、例えばレポートやポートフォリオの作成など、自己／他者理解とアウトプットを中心に据えた授業デザインも可能であろう。

「ビジネス日本語I」「ビジネス日本語II」のいずれについても、大学が設置する留学生科目という文脈において、どのような授業実践が考えられるのか、検討を重ねていく必要がある。

4. 結論と今後の課題

本研究では、筆者の実施した「ビジネス日本語」の実践研究を通じて、自律的なキャリア形成を支える日本語教育の可能性について検討した。その結果、先行研究において指摘された就職・就労場面における言語能力育成や文化習慣の理解に加えて、学習者自身が自己／他者のキャリアと向き合う経験を授業の中に位置づけることの重要性が示唆された。その際には、例えばクラスメイトだけではなく、先輩留学生、教職員、企業関係者など、教室内外の多様な他者との交流が鍵となるだろう。就職・就労に関するテーマを軸に多様な他者と関わり、自身の現状や将来について考える機会を提供することによって、キャリア形成に対する不安を軽減すると同時に、主体性・自律性を育むことにつながるのではないかと考えられる。そのためには、個々の授業内容だけでなく、留学生が自らのキャリアについて考え、振り返り、次の行動へとつなげられるような学習環境をどのようにデザインするかを、大学全体の中で考えることが欠かせない。

本研究の今後の課題は、第一に、前述の通り「ビジネス日本語」の学習を個々の授業にとどめず、カリキュラムとして体系化していくことである。特に、教室内外の連携をどのように機関全体の教育体制の中に組み込んでいくのかについては、今後さらに検討を続ける必要がある。そして第二に、ビジネス日本語の学習が、大学卒業後のキャリア形成にどのような影響を与えるのか、長期的な効果を検証することである。そのためには、研究／実践ともに就職活動や進路選択に限定するのではなく、その後の生活全般を通じたライフキャリア形成を見据えたものとして、再構成されなければならない。今後の課題としたい。

参考文献

- 一般社団法人留学生支援ネットワーク(2021)『教育機関のための外国人留学生ビジネス日本語教育ガイド』
- 公益社団法人日本語教育学会 (2019) 「〔特集〕 日本語が拓く多様なキャリア形成」『日本語教育』175
- 公益社団法人日本語教育学会 (2023) 「〔特集〕 ともに学ぶ未来を描くキャリアの現場」『日本語教育』184
- 公益社団法人日本語教育学会 (2026) 「〔特集〕 ライフキャリアと日本語教育」『日本語教育』193
- 千駄ヶ谷日本語教育研究所 (2020) 『外国人のためのケーススタディで学ぶビジネス日本語 中級』スリーエーネットワーク
- 館岡洋子 (2008) 協働による学びのデザインー協働的学習における「実践から立ち上がる理論」．細川英雄，ことばと文化の教育を考える会（編）『ことばの教育を実践する・探究するー活動型日本語教育の広がり』pp. 41-56，凡人社
- なかのまき (2013) 「だれのための「ビジネス日本語」か：言語教育教材としての「ビジネス日本語マナー教材」にみられる同化主義」『社会言語学』13, pp.17-41
- 花田光世，宮地夕紀子(2003)「キャリア自律を考える」『日本におけるキャリア自律の展開 CRL REPORT』No.1
- 松尾憲暁，山本晋也，高井かおり(2026)「日本語教育におけるキャリア研究の動向と展望」『日本語教育』193, pp.4-18